あさ 4

2201

亀田虎童子

これ以上大きくならず水中花

夏鶯百たび鳴けば日の昏るる

九十五歳声聞かせばや鬼やらひ

友老いていつか茸の目利きなる

思ひ出は思ひ出を生む落椿

物想ふ容してをり蟬の殻

あを

四月集

流れ

佐藤　竹僊

母に向き双手差しだす毛絲の輪

剪定の著きところの梅の花

叁道ですれちがひたる雪中花

白梅のベンガラ紋の凛とあり

春雨や窓をあけると春の風

川上より流れてきたる春の水

二月

長崎桂子

初春の女子の駅伝笑と苦渋

北の間に明るさ奥へ日脚伸ぶ

深い鉢の寄せ植ゑ二月の莟

沸き起り行方いづこか雲二月

感の明やっと莟の二輪かな

陽射消ゆ揉合ふ風や春吹雪

残る雪鈴鹿連峰縞模様

ガラス窓春光あふる桃源郷

雑詠

森なほ子

日陰りてたちまち居間のうそ寒し

節分の一句得ざるは鬼のせひ

隣家より偏屈爺の「鬼は外」

明日よりは春の鳥なり寒鳥

立春や鵯の啄む昨夜の豆

千の蕾咲かせてみたしブロッコリー

バレンタインデー引いて馬鈴薯古歳時記

北京五輪

赤座典子

「イマジン」流る開会式や冴返る
世代交代盛者必衰春浅し
氷上の石の行く末朧にて
若者の羽搏く力春の燭
バラードを緩やかに舞ふ春の宵

令和四年の星祭

秋川泉

雪の中餌ねだり鳴く茶トラ猫
浜防風佳き日の供物三束ほど
節分会マスクの僧の大般若
涅槃図の獅子は腹出し嘆きをり
立春の花壇に光やはらかに
バレンタイン発熱ありとメール来る
芹ご飯ほのかに香り二膳目を
裏庭の梅ひそやかに散り初める

時代

七郎衛門吉保

袋入り豆も護身の鬼やらひ
冬天に国家威信の幻燈絵
入場は画数順にダウン着て
百箇国競ふマスクも厚手かな
日脚伸ぶメダルの数も伸びにけり
美女たちも踏絵に惑ふウクライナ
誰が止めるプーチン暴走利休の忌
虚子詠みし「マスクして」の句時代(とき)はいつ

をぢさん

篠田純子

日の梅や日影の蕾たづさへて
売店のをぢさん弾む梅日和
スノーボード回転金髪のおさげ跳ね
春愁を弾き飛ばせり「カーリング」
婿より年玉「新機種スマホ」おし戴く
木の芽どき物狂ひせる大統領

ひかりのある世界

篠田大佳

薄氷やまなこにひかり入るけふぞ
ブレーキを緩め流るる雲の春
バラードの玉虫色のなみだかな
春水よ色には色があつたのだ
せせらぎの水面に跳ぬる春の日よ

猫の日

須賀敏子

金柑の色濃くなって鵯の影
蝋梅や客多ければ香り立つ
春光や友健やかに喜寿迎へ
ブロッコリー乗せるシチューの中心に
追ひ越されゆくこと多し蕗のたう
新しき靴フィットしていぬふぐり
二〇二二年二月二十二日は猫主役
県界越えることなく二月尽

春を待つ

田中藤穂

なかなかにコロナの減らず春を待つ
大勢で大声で鍋かこみたし
細雪わづかに積もる塀の上
曾孫たち湯沢でスキーといふ電話
老人に日昏れは淋し小雪降る

一月や（三月号補遺）

須賀敏子

一月や銀座で句会あった頃
今朝も又雨戸の重き寒の内
白梅はまだ紅梅は三分ほど
目白来て鵯来て終はる実千両
駐車場見慣れぬ猫の日向ぼこ
長編の世界で遊ぶ冬籠り
のど飴を選ぶあれこれ松七日
気が付けば午前二時なり編始

烝収集

喧嘩相手欲しくなりたる寒さかな　亀田虎童子

凍蝶のうす目あけたるやうな午后　佐藤　竹僊
冷蔵庫に食料いっぱいお正月　田中　藤穂
さよならの年となるかも暦替ふ　長崎　桂子
年重ね吾が郷の海初景色　森　なほ子
隣家より偏屈爺の「鬼は外」　赤座　典子
千の蕾咲かせてみたしブロッコリー　秋川　泉
コロナ禍や籠り続けて去年今年　大日向幸江
探梅や茶トラも三毛もついて来る　七郎衛門吉保
寒風にさらされながら話し込む
懸命に生きる猫の子拾ひけり
あれやこれ賽銭足すや初詣

初詣口開け見入るマルベル堂　篠田　純子
汽車往くや孤独の人は雪を見る　篠田　大佳
のど飴を選ぶあれこれ松七日　須賀敏子
手作りの葩餅を風呂敷に　田中　藤穂
桜の芽ほのと息づく気配あり
陽射あり鏡開の舌鼓　長崎　桂子
芭蕉より一茶好きな日セロリ噛む　森　なほ子
南の島より津波の来る小正月　赤座　典子
雪掻きは深夜が勝負カリカリと　秋川　泉
大晦日家族が集ふ窓明り　大日向幸江
トンガ島再起を願ふ実南天　七郎衛門吉保
寒鴉人に甘えることもある　篠田大佳
背を正しゆっくり歩む喜寿の春　須賀敏子

喜孝抄

二月号作品より

篠田純子・篠田大佳・佐藤喜孝

鶺鴒を連れて耕人振り向かず　佐藤竹僊

「鶺鴒」の解釈が悩ましいです。鶺鴒は秋の小鳥で、石叩き、恋教えという意味に広がりますが、賑やかな鶺鴒の様子を見ても、耕人の様子は一つも変わることがありません。鶺鴒の気配に振り返らないのか、鶺鴒が導く恋の気配に振り向かないのか。鈍感で無愛想な耕人を想像します。（大佳）

われもかうのそばにたたずむやうな人　佐藤竹僊

地味な和服姿の、年配の女性が見えてきます。物静かで立ち居振る舞いも、落ち着いています。小筆でさらりと草書で、散らし書きに俳句を書いています。（純子）

プロペラの音の行方や枯木立　須賀敏子

飛行機かヘリコプターかが頭上を飛んでいます。もしかしたらオスプレイかも知れません。枯木立の季語に、不穏な空気感が伝わってきます。（純子）

冴え冴えと椎の上なる丸い月　田中藤穂

この句に、万葉集の有馬皇子の歌を思いました。「家にあれば笥（け）に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」悲劇の皇子が月を見上げ、椎の葉が艶々と月光に照り輝いています。（純子）

極月やジビエ料理に笑み揃ふ　長崎桂子

畑を荒らす鹿や猪を「ジビエ料理」にして食するのが、流行っているようです。お友達との年忘れの会で、賑やかな食事を楽しんでいらっしゃいます。「極月」と、「ジビエ」の語彙が良い関係を保っています。（純子）

苔に散る白山茶花や銀閣寺　森なほ子

苔に散る白い花びらの美しさが伝わってきます。白山茶花は、銀閣寺向月台の白砂を連想させ、銀閣寺のたたずまいが目に浮かびます。耽美的な秀句と思いました。（純子）

熱燗の鮎の尻尾をふうと吹く　赤座典子

まだ尾に火のついている焼きたての鮎を熱燗へ。「ジュウー」と投入の音と、作者の「フーフー」と火消しの音を感じます。一口味わったあとの笑顔も見えてきます。（純子）

花神楽鬼舞ふ中に友のあり　秋川　泉

郷土の雰囲気の漂う句と感じました。友の舞う姿に懐かしさと、変わりない祭りのありように、安堵している作者が見えてきます。（純子）

弥勒菩薩手は頬に添へ雪雪雪　　大日向幸江

窓ガラスに映る作者自身の姿を、半跏思惟の菩薩に見立てています。外は雪が容赦なく降ってきて、積もり始めているようです。窓辺の作者は、アルカイックスマイルの風情です。（純子）

冬雲と白煙交差仁王像　　七郎衛門吉保

濃い灰色の冬雲が地上に圧をかけてきます。立ち昇る白煙の軽さと映え合う中に、仁王像の丹の色が鮮やかに、存在感を顕します。仁王は実像として鑑賞しました。（純子）

われもまた師走の歩幅日本橋　　篠田純子

「師走」に広い歩幅、急いでいる様子がうかがえます。日本橋という舞台から、さらにオフィス街の忙しい感じや周りの流れに任せる感じが加わってきます。作者は「歩幅」を詠んでいますが、句に潜り込むと作者の歩くリズムも聞こえてきます。（大佳）

藤穂女史の化粧待ちをり冬薔薇　　篠田純子

「女史」は【社会的地位や名声のある女性を敬意を込めていう語。また、その女性の名前に添えて敬意を表す語。】と。まさに藤穂さんに相応しい。云はれてゐる藤穂さんは恥づかしさうに微笑まれてゐることだらう。純子さんがいっしょにおでかけしやうとお迎へに行った時の句だらう。支度が済むまで庭の冬さうびを観賞しながら待つ、そんなひとときのスケッチがとはの別れの一句になってしまった。（喜孝）

公園の芝生に莫蓙を敷き冬至　　篠田大佳

昼休みの公園で、莫蓙に座して寛いでいます。「ああ、今日は冬至」と呟き、昼の時間の一番短いこの日を楽しんでいる様です。（純子）

揺れ鎮もり埃ゆっくり落つる冬　　篠田大佳

揺れの原因は地震であらう。その地震の揺れも治まった。落ち着いて異常はないか部屋を見廻す。そんな折の作品。詠む対象が埃とは。地味で面白い視点の句である。（喜孝）

水仙にたまる師走の埃かな　　高井几董

風鈴の埃はらひし音色かな　　斎藤嘉久

春埃はらへばギター鳴りいづる　　田中藤穂

はしたて集

佐藤喜孝

長崎桂子

春の節電個個のワットを減少す

冴返る交通整理の重装備

○日本の発電能力は余裕がないらしい。先ごろ政府から呼びかけがあり、個人個人もできる限りの節電をした。地球温暖化を遅らせる方途にも、発電方法にもと地球世論が喧しい。大型電器店も灯火管制などで協力したとニュースで知った。桂子さんは経験したことを着実に一句に遺してをられる。

○冴返る町の交通整理。防寒具で実を固めてゐる。民間の交通誘導とは違ひ警察官ともなるといろいろ道具を身につけてをられるのだらう。むかし交差点の真ん中に踏台を置いて交通整理をしていたお巡りさんをよく見かけた。

森なほ子

ホラ吹きといふ語廃れて四月馬鹿

早生まれも四月生まれも入学式

○なほ子さんは「言葉」に興味が深い。句の端々で伝はってくる。「ホラ」は辞書によると「法螺」と書く。法螺貝の事である。ホラ話は荒唐無稽な罪の軽い嘘のやうにおもふ。四月馬鹿に相応しい。

○四月生れの同学年であっても一歳違ひの同級生がゐる。我家にも四月一日生まれがゐる。あと少しで二日になった時に生まれた。医者に手加減するやうお願ひしたが国立病院ではいかんともし難かった。なほ子さんの身辺にも四月一日生れの方がをられてこの句が出来たのかもしれない。

赤座典子

理不尽な露の侵攻や利休の忌

「展覧会の絵」を聞き比ぶ余寒の夜

○【戦争は国際法上宣戦布告により発生し、統治国間に戦時国際法が適用される】とある。また「侵攻」の項には「侵犯」といふ語も見える。今起きているロシアの行動はまさに侵攻である。利休忌は陰暦二月二十八日。新暦では三月三十日。ロシアによるウクライナ信仰は二月二十四日。このような日付の絡みで利休の忌とロシアのウクライナ侵攻とからませたのだろうか。それとも利休の理不尽な死を賜った事に思ひが及んだのだろうか。

○ムソルグスキーの「展覧会の絵」の原曲はピアノ曲。様々な人により編曲され親しまれてきた。組曲の中のひとつに「キエフの大門」がある。見上げるやうな大きな建造物が目の前に現る壮大な曲である。典子さんは聴き比べそれぞれのを楽しまれた余寒の一夜であった。ピアノ演奏もよいが1「キエフの大門」は管弦楽だと一層盛り上がる。今「キエフの大門」を聴くと特別な思ひが湧いてきた。

秋川　泉

寒明けの出没怪し家鼠
繭玉やカリンバの音やさしかり

○鼠もその家に慣れてくると昼と云はず夜と云はずお出ましになる。私は鼠のしっぽが殊に嫌い。

猫や犬のやうに毛が生えてゐてくれると助かるのだが。あの剥きだしのしっぽはいただけない。何度鼠捕のお世話になったことだらう。家を無理して建て替へた一因かもしれない。

泉さんはなぜ「怪し」と思はれたのだらう。鼠の出没が「怪し」ならさうだと思ふが、「寒明け」でなぜ「怪し」なのかと思ってしまった。「寒明けや出入りあやしき家鼠」。

○泉さんの随筆でカリンバを知った。素朴な造りの楽器でオルゴールのやうな優しい音色。早速私も試しにと安価な物を求めた。開封、余りの粗悪品で直返品した。掲句の「繭玉」と「カリンバ」の取り合せは見事。「音のやさしかり」でもよい。

七郎衛門吉保

ショパン「雨だれ」に似た音雪雫
ベートーヴェン「田園」に籠む春の音

○「雨だれ」の曲の左手が受けもつ ポツポツといふ音が印象的。雨だれを吉保さんは雪解けの雫の音と似てゐるなと詠まれた。雨から雪と見立てを変えたところが吉保さんらしい。「雪滴」は春の季語。

○ショパンからベートーベン。ベートーベン自身が題をつけた「田園交響曲」。組曲の最後は「牧歌、嵐の後の喜ばしい感謝の気持ち」とした。ベートーベンの意図にこだはらず、吉保さんは田園に春

の息吹き、ざわめきを覚えられた。両句とも作曲者名を外してよいと思ひます。それほど人口に膾炙してゐるとおもひます。

篠田大佳

首都東京キッチンカーのうららけし
白梅や散歩の仮の目的地

○「キッチンカーのうららけし」と言はれてみると、さうだなぁとうなづいてしまった。「首都東京」で何の不足不満は無いのだが、無い物ねだりをしたいところでもある。

○國木田獨歩の『武蔵野』に道が二つに岐れたら杖の倒れた方にすすむやうなことが書かれてゐたかと思ふ。目的地のないのが本来の散歩。さて右に行こうか左にしようか。そうだと仮の目的地を思いついた。

注意しなければならない。亀田虎童子さんは、「俳句はつまるところ表現」とよく句会で言はれた。高島茂俳句のアンチテーゼと私は勝手に聞いた。「白梅や」のところは如何様にも作品が変容する。「俳句は表現」で別の次元に行ける。

須賀敏子

二月二十四日ロシア軍ウクライナへ侵攻

日脚伸ぶ戦始める男あり
春悲し戦車が街に連らなって

○侵攻のニュースで心を痛めてゐる。掲句は心痛、怒りを表面に出さず坦々と事実を述べることにとどめてゐる。連日のテレビ画面で様々な種類の発言を聞いた。ロシアを非難する人ばかりではない。ウクライナにも一因があるとまでいふ発言者もをられた。「日脚伸ぶ」といふ季語と云ひ作者の心中は覗けない。「男あり」は特定の人をさしてもいるし、女と違ひ男は戦を始める本質を持ってゐるとも読める。

○前句と違ひ「春悲し」で何をどう見てゐるのかが知れる。直截的ではあるが。

敏子さんは戦争、安保、原発などに対して溢れる思ひを抱かれてゐる。その思ひを勇気をもってもっとストレートに伝へたらいかがかと思ふ。

田中藤穂

椋鳥の一羽の去らぬ日暮れかな
さっと見てすぐ家に入る冬満月

○二月末日締切の投稿句です。投句箋の下五「冬の庭」を消して「日暮れかな」と推敲の跡が見えます。椋鳥は秋の季語なので作られた時が冬なので「冬の庭」とされた。が、推敲し自分の心情に沿ひたく作品のやうにされたとおもふ。作品はこの表現により数段も上の格を得た。日暮れても去らぬ一羽の椋鳥、群れを作る習性の椋鳥が一羽でじっと庭の木に止まってゐる。藤穂さんも何か心にひっかかり、去るまで椋鳥を見てをられたことだらう。

○「さっと」部屋に戻られたのは何故だらう。寒かったのだらうか、月を見慣れたからだらうか。なぜこの様な動作を作品に詠まれたのだらうか。不思議な句である。藤穂さんの内側を覗く謎解きには時が要りやうだ。

相撲

相撲　篠田純子

最初に相撲を見たのは、蔵前国技館で、本場所ではなく引退興行の花相撲でした。桟敷席でしたので窮屈だった事、弁当やあんみつを食べた事、北の富士も色白でしたが、大鵬の肌の色が飛び抜けて白かった事を記憶しています。稀勢の里の横綱土俵入りを、今度は両国国技館で見ました。まだコロナ前でしたので、館内の歓声や掛け声が、わんわんと響いていました。ちなみに私の贔屓は遠藤で、残念ながら見に行った時は負ける事が多いのです。（純子）

わんぱく相撲　篠田大佳

小学校の時、一回だけわんぱく相撲に出たことがあります。勝ちたがりな性格で、校内練習の時に上級生相手に猫騙しをしたら勝ってしまって、「ずるい」と詰められ自粛した記憶があります。本番は一回戦負けでした。

玉恵ちゃん

秋川　泉

山の分校は、一年生から四年生までの小学校であった。校庭は広く目の前にいつも丹沢連峰と共に富士山が裾野まで広がって雄大であった。その校庭に土を盛って作られた立派な土俵があった。子供達は男女を問わず相撲をとった.ある時下級生の玉恵ちゃんが上級生の男子にみごとな投げを打って勝った。子供達は拍手喝采。しかし玉恵ちゃんは、まさかの上級生男子に勝ったことがショックだったのか、拍手喝采が嫌だったのか……泣いてしまった。なんで泣くの……勝ったのに……と不思議な気持ちでいた。ことを私は、映画のシーンのように覚えている。そして、その玉恵ちゃんが亡くなったことを私は数年前に知った。かわいらしい少女であった。

息子と相撲

田中藤穂

長男が小さい頃、よく相撲をとって遊んだ。幼稚園の頃である。組み合っても最後は私がころんで子供を勝たせてあげる。でも見抜かれていたのだ。「どうしてまま最後に転ぶの。」だと。

近所の洋ちゃんは一歳上だったので何回やっても洋ちゃんが勝つ。私は座布団を柱に押し付けて怪我をしないようにする。「洋ちゃんとお相撲とって面白いの。」「面白いよー。」負けてもやっぱり本気の勝負が面白いらしかった。今はもう息子と相撲を取るには老い過ぎてしまった

間

滴りの絶え間なく降る溪の木木　長崎　桂子
鰻重を待ってゐる間の冷酒かな　木村茂登子
束の間をホテルに憩ふ作り滝　森山のりこ
秋の蝉紅茶待つ間の砂時計　篠田　純子
いつの間に拾うてをりし銀杏の実　佐藤　恭子
瞬く間糸を纏める女郎蜘蛛　東　亜　未
病院で待つ間の讀書時雨来る　鎌倉喜久恵
青葉風雨の止む間を渡り来る　長崎　桂子
いつの間に裏返りゐて夏蒲団　堀内　一郎
古代蓮咲いて束の間夢の国　森山のりこ
朝刊の束の間匂ふ震災忌　藤野　寿子
何もせぬ間に九月逃げてゆき　鎌倉喜久恵
ビル影の合間を縫ふて布団干す　斉藤　裕子
束の間の和やかな時ふきのたう　赤座　典子
留守の間に紫陽花の色変りけり　森山のりこ
束の間の花火に願ひ掛けてみる　森山のりこ
束の間ともいくたび劫暑かさねしとも　竹内　弘子
汗を拭く間も考へてゐる言葉　芝　尚子
やれやれと思ふ間もなく来る寒さ　吉成美代子
明洞のバスを待つ間の六花かな　木村茂登子
つかの間の眼のなごみ薄氷　木村茂登子
待たされてゐる間の馳走扇風機　田中　藤穂
敗荷となるに間のある青い風　長崎　桂子
残る虫間をおき音階精一杯　早崎　泰江
冬の暮何故か鴉の声間のび　木村茂登子
風鈴市風のリズムに絶え間なく　須賀　敏子
子かまきり三日見ぬ間に大人びて　木村茂登子
髪洗ふ間のもどかしや除夜の鐘　山荘　慶子
あぢさゐを剪る衰への見えぬ間に　井上　石動
いつの間に付きし毛虫や鋭かり　長崎　桂子
花栗や間なしの雨の熄みたるらし　森　理和
柿日和柿を抓んで束の間を　七郎衛門吉保
何時の間に葉は閉じてをり合歓の花　森　なほ子
受験生開門待つ間の足踏み　篠田　純子
知らぬ間に咲いては散つて夏椿　篠田　純子
長き間を羽繕へり水の秋　赤座　典子
聖夜奏ひとつ間の落つハンドベル　田中　藤穂
束の間のパパの休息夏燕　定梶じょう
知らぬ間に薺花咲く縁の下　佐藤　恭子
万愚節しゃっくりいつの間に止まり　須賀　敏子
いつの間に遠のく池の散り松葉　秋川　泉
束の間の光の中にみそさざい
知らぬ間に昨日だと聞く春一番

マーケット

金雀枝や賑はふフリーマーケット

麻雀

麻雀卓ほどの廣さに女郎蜘蛛　佐藤　喜孝

マーマレード

梅雨の入りトロトロトロとマーマレード　須賀　敏子
母の日やマーマレードができました　須賀　敏子
マーマレードの甘さ控え目夏初め　須賀　敏子
早々と梅雨入りの日のマーマレード　山荘　慶子
椪柑はマーマレードに朝の卓

舞

「天鼓」舞ふ足拍子にも秋の声　芝　尚子
秋の能「三輪」の天女の舞ひ無邪気　芝　尚子
手の裡に光かさねて螢舞ふ　赤座　典子
かこひたる掌にふれずして舞ふ螢　赤座　典子
抱擁のラストシーンに落葉舞ふ　栢森　定男
碧蹄館舞ふ黒い手袋朱のてぶくろ　堀内　一郎
白鷺舞ふ南湖丸ごと借景に　松本　米子
枯葉舞ふ昔の街をたづね来し　芝宮須磨子
枯葉舞ふ鏡がはりのショーウインドウ　森　理和
若武者の箙の梅や舞の袖　芝　尚子
赤いもの真東風あまりて宙に舞ふ　佐藤　恭子
螢舞ふ目白二丁目雨水桝　森　理和
秋の空天使の糸の舞ひ上る　松村美智子
ゴンドラの風舞ひ落す櫨紅葉　赤座　典子
月下美人ほしいままなる主役の舞　松村美智子
えぞしかよ綿虫が舞ひはじめたぞ　田中　藤穂
箱根駅伝舞ふ粉雪の大写し　赤座　典子
野天風呂肩先に舞ふ牡丹雪　関口　ゆき
花しまき坂を駆け抜け街に舞ふ　鎌倉喜久恵
潮風を十字に舞ふや初つばめ　鎌倉喜久恵
絢爛と急坂に舞ふ紅卯木　赤座　典子
宙に舞ひ地に舞ひながら三社祭　鈴木多枝子
海面につきささるかと燕舞ふ　鎌倉喜久恵
宙に咲く竜舌蘭に羽虫舞ふ　芝　尚子
鵠鴒の舞ふかに交す箒川　芝宮須磨子
巫女ふたり浦安の舞さはやかに　堀内　一郎
湯治場に淡雪舞つて骨休　須賀　敏子
峡谷の宿鳶の舞見下せる　赤座　典子
白玉の舞はずに上る重さかな　赤座　典子
朝戸繰るはや秋天に鳶の舞ふ　鎌倉喜久恵
雪螢落し紙から舞ひたつや　佐藤　恭子
格天井天女の舞や冬初め　森山のりこ
冬野ゆく記憶のひとつ空に舞ふ　渡邉　友七
春雪の舞ひとひらを掌に残し　森山のりこ
獅子舞の口ひらききる春の風　渡邉　友七
六月やとんびは舞ふて鰡はねて　早崎　泰江
黒揚羽川辺に群れて舞昇る　森山のりこ

大足のカレーの市民銀杏舞ふ　田中　藤穂
日の中や木の葉舞ひ上ぐ仔犬かな　佐藤　恭子
風花の舞ふ竜ヶ岳富士間近　須賀　敏子
木の葉舞ふ金星今宵大きかり　赤座　典子
木の葉舞うファーストシューズの児の歩み　須賀　敏子
木の葉の舞ふ時季のをはりは始めなり　長崎　桂子
風もなく木の葉舞ひ込む露天風呂　芝　尚子
高々と空袋舞ふつめたき日　鈴木多枝子
風花の舞ふ竜ヶ岳富士間近　須賀　敏子
空ら部屋に舞ひ冬蠅や移り行く　渡邉　友七
大綿や小さき掌くうを舞ふ　佐藤　恭子
月あかり風花舞うて魂送る　鎌倉喜久恵
輪生の炎舞ひ立つ野焼かな　木村茂登子
氷上の妖精の舞酔ひしれぬ　森山のりこ
ひがないち日風花の舞ふ通夜の家　鈴木多枝子
笹百合を手にかざしては巫女の舞ふ　渡邉　友七
数へ日の青空高く凧の舞ふ　須賀　敏子
湧くやうに降るやうに舞ふ真昼の蛾　篠田　純子
日輪のかけらの如く風花舞ふ　渡邉　友七
初空に烏の羽の舞ふ時刻　佐藤　恭子
朝市の赤蕪漬に雪の舞ふ　早崎　泰江
青虫のなかぞらでまふ糸で舞ふ　佐藤　恭子
街空を悠々と舞ふ春の鳶　鎌倉喜久恵

春の鳶灯台守るごとく舞ふ　早崎　泰江
台風禍停電烏舞ひ遊ぶ　藤野　寿子
舞ひ舞ひつ土にとどかぬ春の雪　木村茂登子
獅子の舞長屋門より始まれり　須賀　敏子
寒牡丹はらりと舞ひしけはいかな　佐藤　恭子
きらきらと初蝶舞ふや洗車中　大日向幸江
嫋やかに乱れず舞へり春の宵　赤座　典子
歩幅揃ふ子供くんちの龍の舞　大日向幸江
鴟尾に舞ひ甍にそひし夏落葉　佐藤　恭子
舞ふ巫子のゆるる挿頭や菊薫る　篠田　純子
枯葉舞ふ西空巨き星を揚ぐ　田中　藤穂
枯葉舞ふ千体地蔵の風車　佐藤　恭子
桃の花突如の風に舞ひにけり　井上　石動
鴨川でランチまくなぎ舞ひどほ　篠田　純子

魔法

料峭や魔法の如き吹きガラス　森山のりこ
目借時魔法のめがね掛けしより　定梶じょう
凍解や魔法使ひは杖をつく　東　亜未
櫻桃忌魔法の効かぬ魔法瓶　篠田　純子
入り彼岸義父の遺せし魔法瓶　田中　藤穂
秋日和ふつか前なる魔法瓶　佐藤　喜孝

下石神井日録

佐藤喜孝

三月中旬　三方が道路に囲まれた結構広いが何の変哲もない空地がある。と冬の間は見てゐた。いつもの図書館通ひの道すがらおやっと思った。紅色の毛氈を広げたやうな空地になってゐる。近寄りスマホをかざすとホトケノザだと。小さな花のホトケノザだが離れてみた群生の様はなかなかである。近寄ると葉の間から花を噴き出すやうに咲いてゐるさまはおもしろい。数日後にはなんと諸葛菜の原に変容してゐる。そして諸葛菜のうす紫を取り囲むやうに朱色のポピーが揺れてゐる。この先、夏にかけてだう変化するのだらうか。もしかしたらすべて刈り取られてしまふのだらうか。楽しみでもあり心配でもある。この花園と道を隔てて椶の木で囲はれた畑がある。椶の芽がおいしさうに噴き出してゐる。出荷してゐるのだらうか。余計な心配をしてゐる。

四月初旬　この町の桜が咲き始めた。こんなところにあんな花が、あんなところにこんな花がと驚きの連続である。様々な種類の桜が家々の庭で咲きだした。鳥居の先が塀から出てゐる家には糸桜が鳥居の朱と相まってあでやかである。桜の古い樹が三本立ってゐる空地がある。空地の片隅に本当に小さな祠がある。注連縄があたらしいなが不思議。道よりこんもり盛り上がった空地にある桜は山桜であった。咲き始めてこの旬日、空地は異次元の空間になった。祠のとなりに結構大きな木造二階家が建ってゐる。廃屋といってもよく指で押したら倒れさうな趣きのある風情で立ってゐる。桜の溌剌さと対比するやうな二階家の取り合せにいつも自転車を止めてしまふ。

四月中旬　この辺りの環八の中央分離帯はまさにグリーンベルト。緑の帯の中から染井吉野が咲き追ひかけて八重桜のピンク、アメリカ花水木の白、躑躅の緋とが新緑の中で共演してゐる。

あとがき

あを初句会

今年になって初めての「あを」の句会。慌てての投句、二ケ所も間違へてしまった。一つは「落花」を「落下」として出句、難解句にしご迷惑をかけた。もうひとつは諸葛菜を別な言ひ方はないかと調べ、「あらせいとう」と早とちりをした。帰って何故か不安になり確認した。結果「あらせいとう」ではなく「おおあらせいとう」であった。もういい年なのだから落ち着かなければと反省した。句会で「春の水」といふ季語はコップの水には云はないと聞いたと発言があった。確かにさう云はれればさうだと頷く。しかしコップの水でも水道の水でも作者が春の水だと思って詠めばそれも可。と私は云ったが言葉足らずであったと反省。コップの水を春の水として読者に納得される作品であることが肝要である。芸術になにをしてはいけない、と云ふものは99パーセントない。もし見聞きしたら疑ってみるのも大切なこと。それにしても行き帰り時に体力の減退を知らされました。翌日から軽い散歩を始めた。

校正

先月号に須賀敏子さんの作品を欠落して仕舞ひご迷惑をおかけした。いつも校正をお願いし大助かりしてゐる。しかしどこかで甘えてゐる様で申し訳なく思ってゐる。今号は時間の都合で校正依頼なしでやってみました。

はしたて集

遅刊から脱出するため残念ですがしばらくはしたて集をお休みいたします。よろしくお願ひします。

（喜孝）

二〇二二年四月号
発行日　四月二十三日
発行所　〒177-0042
東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井2　一階
電　話　090　9828　4244
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番 018）45864 02
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）